

# 第2回幌向湿原吟行 フットパス with 俳句

＊四十二句の詠草と短評＊

## 《総評》

幌向湿原再生に協賛する吟行句会としては第2回目となります。恒例の馬頭琴演奏と喉歌に、今年はしめつつ落語も加わり、ため息・笑い声が空に響く素晴らしい一日となりました。落語は言葉に興ずる芸、人を感嘆させる原点を見せてくれますが、さて句作に生きたでしょうか。また、湿原再生イベントが2年目となり、昨年の移植体験の成果や湿原再生を心待ちにする参加者が多く、バラエティ豊かな句が揃いました。

ご自身の句のほか、皆さんの句を改めてご堪能下さい。小生の評は拙ないのですが、短評のほか一部、添削を試みましたので、あくまでも参考として下さい。なお、湿原再生に協賛する本吟行句会の主旨が生かされている作品に「秀句」と付しました。引き続き俳句を楽しみましょう。有り難うございました

藤田ひろし

つらなりて幌向の地へ赤とんぼ

澄子

喉歌の風わたりゆく花野かな

澄子

天高くしめつつ落語の笑ひ声

しをん

「天高く」に湿っ地？でおやと思わせ実は落語だったと。笑い声が天に届く高尚な落ちがついて脱帽。湿っ地再生でもあり秀句

よみがへる湿地の色や沢枯梗

しをん

幌向湿原再生を色の变化で喜び。秋は紫が代表する。秀句

草むらにオツネントンボ秋涼む

カメ老

とんぼの休息とおもえる秋涼、吾もそうしようかと共鳴する。

ミスゴケの育つを願う秋日和

カメ老

のどけさの中に素直な実感がこもります。「育つを」を変えて、「水苔の育成願う秋日和」秀句

さや風やつなのブランコとんぼうに よりこ

加賀千代女は、「朝顔やつるべ取られてもらひ水」と詠ったが、この句は読者にその後を想像させます。

麦畑つつく揺れるきじ衣

よりこ

「つつく」が麦穂の実りを的確に表現する。「きじ衣」では読者に伝わりにくいので、「麦畑雉もつつく現るる」

立ち話胸元飾る赤とんぼ

けに子

とんぼがよぎることはありますが、「胸元」とは素敵な秋です。

南幌の湿原に根付け我のミスゴケ

けに子

素直な心情ですが散文的なので、「水苔や根付け幌向秋の風」

赤とんぼ追いつ抜かれつさんぽ道 苔子

追憶も呼び起こし、とんぼとの交流がさわやか。

幌向の湿地の秋に結ぶ夢

あきお

湿地再生が現実となりつつある。「結ぶ夢」は抽象的か。

蜻蛉飛ぶ原野に染みる馬頭琴

あきお

自然との共生を願望し、秀句

草むらを歩けば濡れる夏の終わり ちちろう

実感と季感を上手く捉えています。下五を「夏の果て」とすると句が締り哀感も出ます。

秋の空指差す如く沢枯梗

齋藤央

たしかにそう、擬人法で枯梗をいきいきと表現。

秋風に野菊を咲かせ夕張川

齋藤央

風に咲かせるとは作者の発見。季重なりを解消して、「夕張川の風は野菊を咲かせをり」

天高き空に響くよ馬頭琴

ヨッコ

高き天に馬頭琴が響く壮大な句。「天」と「空」の重なりが少し勿体ない。

秋日和つなぎトンボにいわし雲 コスモス

目をやる流れが自然で三つの季重ねが気にならない。「つなぎ」も見事。

山口素堂の句「目には青葉山ほととぎす初鯉」に匹敵するのではと。

フットパス湿地再生小鳥来る

一郎

湿地再生に呼応した季語「小鳥来る」の使い方がぴたりと見事。秀句

武四郎や湿地踏み分け天高し

一郎

本年は武四郎が北海道と名付けて150年。石狩・空知を幾度も踏査し、天を仰いだことでしよう。

泥炭野草のささやき秋麗 そうきち

本来植生に厳しい泥炭地の秋の一場面、優しい作者の目。語順を入れ替えて、「秋うらら野草ささやく泥炭地」

羽休め止まり場列なす秋帽子 そうきち

言いたいことを詰め込みすぎて分かりにくいので、「止まり場に列なしている秋茜」

雨あがりシメツチネットカントン鳴く モトハバ

「雨ががり〜邯鄲鳴く」でほぼ良しの句。「シメツチネットカントン」と嵌め込んで実に面白い。落語生きてますね。

キリギリス嵐を待つ間協奏曲 モトハバ

「嵐待つ間の」とすると、収まりが良いです。さらに、「きりぎりす嵐来るらし前奏曲」も。

秋うらら湿原にすむ野草かな りえ

「すむ」が曖昧なので、「秋うらら湿原の草背伸びせり」

青空と湿地の間に赤トンボ ブリジス

実景そのものですが、動きを入れてみましょう。「青空と湿地行き交う赤とんぼ」

虫の音は再生の野に永遠に響かん 直人

再生が戻った暁には、虫が虫で生きられる大地でありますように。

秋耕の下に生きづく開拓心 まんげつ

北海道の開拓は、空知の灌漑排水から始まり、ほぼ150年。今では旨い米、麦、野菜等がとれ、さらに関係者の挑戦が続いている。有り難うございます。秀句

赤とんぼ軽トラ高座の特等席 まんげつ

「とんぼの特等席」とあり、しめつち落語の高座が目に浮かぶよう。秀句

みずあおい水辺の一花目に蒼し まんげつ

一花が心を引きつけるものは何? 「蒼」が際立つ丁寧な写生句。

湿地吹く風を蜻蛉は覚えているか 厚裕

作者のあの日の感慨を蜻蛉に託して詠う。ポエムです。

いつの日か湿原の風トンボの空 厚裕

あの日のように湿原にトンボの空が戻りますようにと。

幌向の原野再生辿る秋 ヒサシ

フットパス吟行を簡潔に。秀句

湿原の秋を惜しむや馬頭琴 ヒサシ

秋惜しむ、そして愉しむ参加者、しみじみした空気感が良いですね。

秋の空五七五の調べロズさむ ともこ

中七をまもってリズムを整えると、更に良く聞きます。「五七五調べロズ秋の空」

虫の音と聴きし喉歌夢ごこち ともこ

まったくそのとおり。語順を変えて分かり易く、「虫の音と喉歌さそう夢ごこち」

秋草に七草添えた輪堤防 次郎

ホロムイ七草を大切にしたい気持ち。「輪堤防秋の七草護りたし」

秋の夢七草揃う幌向野 次郎

湿原再生の効果を早く実感したいですね。「秋の野に幌向七草そろう夢」

※以下の二句は、しめつち落語の中で披露された、こみゆに亭楽時男さんのお母様の作品です。

晩夏光草踏む水の柔らかし 丸山貞子

草ではなく「水の柔らかし」と詠まれた作者の発見。写生でありながら足感が伝わってきます。

湿地帯蝶飛ぶ影の少なくなり 丸山貞子

幌向湿原も晩秋に向います。冬の厳しさを乗り越えて来春また進んだ再生を期待しましょう。

吟友に遅れし畦の草紅葉 ひろし

幌向湿原再生順調草紅葉 ひろし